

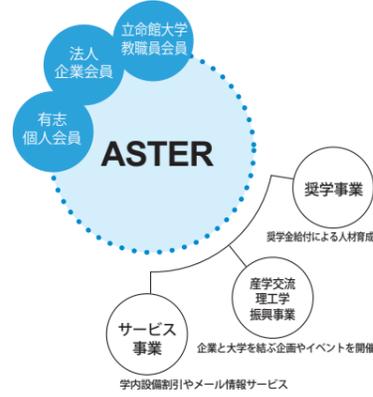
出張講義のご案内

立命館大学の教員・職員が御社に伺い、御社のニーズにカスタマイズした講義を行います。お気軽に事務局にご相談ください。
(年1回まで無料でご利用頂けます)

2009年度 出張講義テーマ		
学部/学科	氏名	テーマ
理工学部 数理科学科	小川 重義	株価変動過程を規定するパラメーターの時間推定法
理工学部 物理科学科	川方 裕則	1. 地震の発生メカニズムに関する研究 2. 地震発生予測に関する研究 3. 岩石の破壊メカニズムに関する研究
理工学部 機械工学科	船山 恵	金属材料の熱処理の基礎/高性能金属材料の開発
	坂根 政男	電子デバイス用はんだ接合部の信頼性評価法/高温構造物の信頼性評価法
	谷 泰弘	1. 高精度研磨技術 2. 固定砥粒工具技術 3. 機械加工工具再生技術
	牧川 方昭	生体工学(生体計測、健康計測などに関する講義が可能)
理工学部 ロボティクス学科	手嶋 教之	福祉の現状と福祉機器開発のポイント/福祉ロボットの現状と課題
	馬 書根	生物知能機械と環境適応ロボットの開発
	岡田 志麻	非接触な睡眠評価方法に関する研究
理工学部 電子情報デザイン学科	山内 寛紀	人物検出、顔検出、顔認識、表情認識、物体認識、テキスト解析、画像ファイン化、JPEGノイズ除去、画像高解像度化、画像符号化、音声分離、生体信号分離、マンモグラフィ画像診断
	福井 正博	1. MATLAB to Silicon(数学モデルから電子実装に至る設計フローの提案) 2. 電池のモデル化とシミュレータ開発
理工学部 環境システム工学科	佐藤 圭輔	GIS、リモートセンシングを利用した情報解析入門、調査、情報公開支援 特に社会基盤・水環境情報分析に関するデータ入手から解析まで対応可能
理工学部 都市システム工学科	伊津野 和行	構造物の耐震設計
	早川 清	1. 地震振動の軽減対策 2. 地震時の地盤および建物の振動挙動
理工学部	塩飽 哲生	市場ニーズを全社的に分析するためのクラウドコンピューティングシステムの研究開発
情報理工学部 情報システム学科	鳥川 博光	図式と学習者カルテに基づく個別プログラミング教育環境
	野澤 和典	マルチメディア教材の開発とCMSの効果的な利用法
	大西 淳	ソフトウェア要求定義の難しさ/ソフトウェア要求使用のまとめ方
	山下 茂	1. 対故障設計~故障が起こっても大丈夫な論理回路の設計手法~ 2. 量子計算~新しい計算機向けのアルゴリズム設計で頭の体操~
情報理工学部 メディア情報学科	西浦 敬信	ハンズフリー集音技術に基づく音環境の理解 -異音や危険信号の検出など安全・安心な音環境を目指して-
	山下 洋一	音声による人とコンピュータとの対話のための音声合成技術
	萩原 啓	睡眠・覚醒と人間工学
情報理工学部 知能情報学科	小林 亮太	時系列解析:観測、測定データからデータの生成機構を推定し、将来を予測する手のできるだけわかりやすく解説したい。
情報理工学部 情報コミュニケーション学科	泉 朋子	動的に変化するネットワークにおける適応的分散プロトコルの提案
生命科学部 生物工学科	今中 忠行	微生物の産業利用
	谷口 吉弘	蛋白質の構造と機能
生命科学部 応用化学科	稲田 康宏	様々な状況下(固体/液体/気体、高温/低温)にある金属種の周辺の局所的な構造と価数の情報を時間分解(典型的にはミリ秒まで)で解析する手法の開発。例えば、反応ガスを迅速に導入した後の不均一系担持金属触媒の構造と価数の変化を比較的高温追跡するなどの研究。
生命科学部 生命情報学(MOT)	香月 祥太郎	1. 技術マーケティング論 2. マーケット・フォーサイトと技術戦略ロードマップ 3. ライフサイエンス事業戦略 4. 我が国の産業技術
生命科学部 生命情報学	菊地 武司	1. タンパク質の立体構造形成機構の予測 2. 自由エネルギー変分原理に基づくタンパクリガンド結合自由エネルギー予測とQSARへの応用
	高橋 卓也	運動、情報伝達、免疫-生命の機能を分子レベルの構造から解明する
	祐伯 敦史	脳と言語、外国語習得と脳科学
生命科学部 生命医科学科	谷田 守	メタボリックシンドロームを予防する方法の開発 -動物の自律神経制御に関する研究-
薬学部 薬学科	谷浦 秀夫	ゲノムインプリンティングと神経発達障害疾患
	北 泰行	独自の手法による新有機合成反応の開発と医薬関連物質の創生研究
立命館 グローバルイノベーション研究機構	杉山 進	1. マイクロ電気・機械システム(MEMS)の進展と新産業創出への期待 2. シンクロトン放射光を利用したものづくりへの挑戦 -マイクロ・ナノ構造体の製作と応用-
	福山 武志	素粒子・宇宙物理学(昨年ノーベル賞の南部陽一郎氏の自発的対称性の破れは、宇宙進化における真空の相転移として、次世代の標準模型の構築とも密接につながっている。)
	鈴木 祥之	歴史・文化財建造物の地震防災/伝統木造建築物の耐震設計・耐震補強
総合理工学研究機構 先端ロボティクス研究センター	金岡 克弥	人と機械の力学的相乗効果を活かすロボットの設計手法

編集後記

今回の日食を皆様はご覧になりましたか?
2009年7月22日(水)、日本の陸地では46年ぶりとなる皆既日食が観察されました。
残念ながらトカラ列島など、多くの地方では天候に恵まれなかったようですが、一部の島や洋上では、コロナやダイヤモンドリングが観察されたようです。
11:06頃、立命館大学のキャンパスでは雲に掛かった盃の形をした日食が観察できました。とても感動しました。
このような珍しい現象を見ることが出来たのは本当に幸せだと感じています。次回の皆既日食は2035年9月2日、北陸・北関東などの地区で見られると言われています。



私たち「ASTER」は立命館大学BKCに基盤を置き、「法人企業会員、立命館大学教職員会員、有志個人会員」の皆様方の支援・ご協力を得て、わが国の理工学の発展・促進を振興する団体です。滋賀県、近江の地から発祥した哲学「三方よし」をモットーとし、「地元産業界」「立命館大学」「わが国」の理工学振興に「よし」を目標に、活動を続けております。

ASTER News Vol.3 2009 Summer

発行 ASTER

Society for the Advancement of Science and Technology at Ritsumeikan

立命館大学理工学振興会

〒525-8577 滋賀県草津市野路東1丁目1-1
立命館大学テクノコンプレックス
理工リサーチオフィス内 理工学振興会事務局

TEL 077-561-2802

FAX 077-561-2811
aster@st.ritsumeikan.ac.jp
http://aster-ritsumeikan.com/
制作:株式会社ママテ

ASTER News

研究者と企業を結び
立命館大学理工学振興会 情報誌

Vol.3
2009 Summer

Society for the Advancement of Science and Technology at Ritsumeikan



Powerful Company
元気企業訪問レポート
| 近江鍛工株式会社



■ 奨学生レポート

2009年度 奨学生8名
研究への想い

■ @Labo 研究者の視点

理工学部 機械工学科 谷 泰弘 教授
情報理工学部 メディア情報学科 西浦 敬信 教授
薬学部 薬学科 北 泰行 教授
生命科学部 生物工学科 久保 幹 教授

■ NEWS TOPICS

- 第14回定時総会開催
- 立命館イノベーションフェア 出展企業募集

奨学生レポート

Scholarship report

立命館大学大学院で
日夜研究に励む学生を紹介しています。

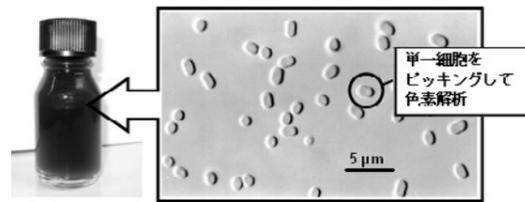


理工学研究科 総合理工学専攻

伊佐治 恵

光合成アンテナ複合体の分子構築

本研究では、光合成細菌の光収穫アンテナとそれを構成する色素に焦点を当てる。具体的には、培養液から単一細胞をピッキングし色素をHPLCで分析することにより、単一細胞の各種アンテナと色素分子との相関を解析する。必須となる高感度HPLC分析系は、紫外可視吸収法・蛍光検出器を利用し、分析装置のマイクロ化仕様変更により構築する。本研究により単一細胞内での各種アンテナと色素の定量的な議論が可能となる。これは、天然を模した光応答性デバイス創製を目指す際、効率的なエネルギー伝達を実現するために重要である。



光合成細菌Chlorobium tepidum(左) 培養液(右)顕微鏡写真



理工学研究科 総合理工学専攻

榎堀 優

スマート環境 (ユビキタスコンピューティング環境) の構築と運用

情報家電やコンピュータ、センサなどを連携させたユビキタスコンピューティング環境を、専門家以外でも構築できるようにするScePT (Smart Computing Environment Packaging Tool) を研究しています。ScePTでは、開発者が仮想的な部屋などの環境にソフトウェアを動作可能な状態にパッケージングし、導入者がパッケージをダウンロードして実際のオフィスなどと結びつけて稼働させることで、誰でも簡単にユビキタスコンピューティング環境を構築できるようにすることを目標としています。



3

理工学研究科 総合理工学専攻

土屋 雄揮



図1:水路の概観

バイオフィルムの性状と機能の解析

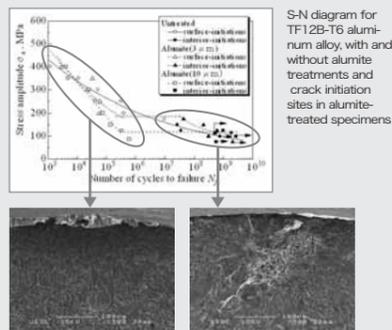
— 環境浄化への応用 —

自然環境中の微生物の多くは、物の表面に付着し、他の種類の微生物と共同体「バイオフィルム(以下BF)」を形成しています。私は現在、京大や琵琶湖博物館と共同で、琵琶湖の環境負荷物質(NO₃⁻、PO₄³⁻など)に対してヨシ表面のBFがはたしている浄化の機構を調べています。また、それだけでなく、人工水路を設計し(図1)、そこで実験的にBFの浄化機構を評価しています。この研究の結果から、環境浄化に適したBFの作製および維持の方法を提案し、実際の環境中でBFによる環境浄化を実現することを目指しています。



理工学研究科 総合理工学専攻

中村 裕紀



金属材料の超長寿命域 回転曲げ疲労特性に対する 表面状態の影響

「AI合金の超高サイクル域回転曲げ疲労特性に対する各種表面処理の影響」というテーマで研究を行っています。近年、AI合金の機能性をさらに向上させるため、様々な表面処理が用いられています。これらは耐食性や耐摩耗性向上を目的として使用されることが多いのですが、機械構造用部品に対して使用するには、それらの疲労特性へ及ぼす影響を十分に把握することが必要不可欠です。そこで、これまでにメッキや溶射、陽極酸化処理(アルマイト処理)等の様々な表面処理を施し、これらが疲労強度と破壊メカニズムへ及ぼす影響を実験的に調べてきました。

6

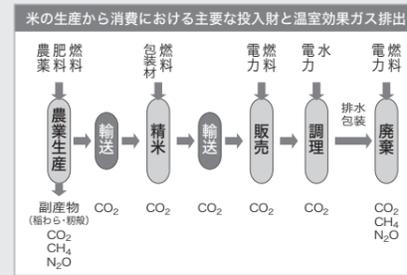
理工学研究科 総合理工学専攻

吉川 直樹



食料消費及び農業・食料系 バイオマスを対象とした 多側面を考慮した持続性の評価

本研究では、日本における食料消費や栽培バイオマスを対象として、ライフサイクルアセスメント(LCA)手法により、その生産から輸送・利用・廃棄に至る過程で発生する環境負荷の定量的評価を行っています。また、バイオマスリサイクルの推進や食料自給率の向上などの施策による環境負荷の変化の予測、さらに、エネルギーセキュリティやフードセキュリティの向上、農業の多面的機能の考慮を含めた総合的な持続可能性の評価を通して、持続可能な農業・食料消費のあり方に関する提案を行うことを目指しています。



理工学研究科 総合理工学専攻

吉富 太一

糖脂質の系統的な 解析システムの構築

光合成生物は高等植物から細菌類まで多様に存在し、これらに欠くことのできない成分の一つとして糖脂質がある。これは細胞膜の主要な成分であり、動物と植物で含有成分が異なっている。高等植物や細菌類はグリセロ糖脂質を多く含有し、動物由来の細菌類などはスフィンゴ糖脂質と呼ばれる糖脂質から構成されている(図1)。光合成生物において、グリセロ糖脂質は重要な働きを持つと考えられ中でもモノガラクトシルジアシルグリセロール(MGDG)という糖脂質は、地球上で最も多い膜脂質と提唱されている。しかし、光合成細菌類において膜糖脂質を調査した例は僅かであった。そこで私は光合成細菌における糖脂質の系統的な解析システムの構築と新規の糖脂質の同定及び応用展開も含めて研究を行っている。

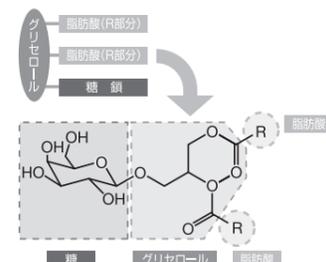


図1. 植物や細菌に含まれるグリセロ糖脂質の構造



理工学研究科 総合理工学専攻

榎堀 優

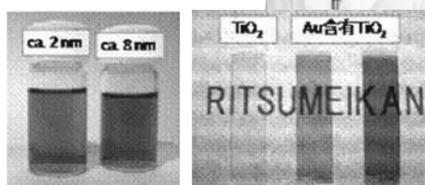
スマート環境 (ユビキタスコンピューティング環境) の構築と運用

情報家電やコンピュータ、センサなどを連携させたユビキタスコンピューティング環境を、専門家以外でも構築できるようにするScePT (Smart Computing Environment Packaging Tool) を研究しています。ScePTでは、開発者が仮想的な部屋などの環境にソフトウェアを動作可能な状態にパッケージングし、導入者がパッケージをダウンロードして実際のオフィスなどと結びつけて稼働させることで、誰でも簡単にユビキタスコンピューティング環境を構築できるようにすることを目標としています。



理工学研究科 フロンティア理工学専攻

与儀 千尋



高分子保護 Au微粒子分散溶液

石英ガラス基板上に作製したTiO₂およびAu含有TiO₂膜。

メチレンブルー 水溶液を用いた 光触媒性評価方法の確立

光エネルギーを利用して、汚れや菌を分解し、さらに水素燃料電池の利用に向けて水からの水素生成を目指す光触媒。光触媒には環境対策など様々な応用が期待されています。私は光触媒活性の評価に用いられるメチレンブルー(MB)水溶液の光触媒分解過程を吸収スペクトル測定のみで詳細に解析する研究をしています。また、高活性な光触媒の作製を目指して、ゾル-ゲル法を用いてAu微粒子を含有させたTiO₂膜を作製し、膜の構造や形態が光触媒活性にどのように影響を及ぼすのかについて、電子顕微鏡(SEM、TEM)、X線(XRD、XAFS)などを用いて研究しています。

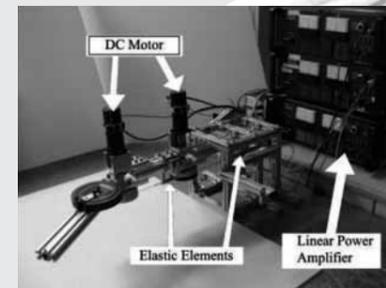


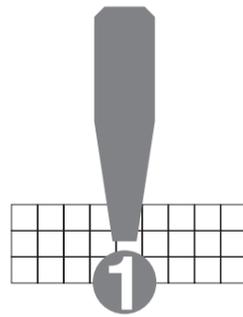
理工学研究科 総合理工学専攻

呂 広強

産業用エネルギー効率の良い 新しいロボットシステム

従来の産業用ロボットシステムよりも、エネルギー効率の良い新しいロボットシステムの構築する。従来の減速比の高い減速器を利用すると摩擦によるエネルギー消費が大きくなる。そこで、ロボットの関節に弾性要素を付加し、弾性要素のポテンシャルエネルギーを有効に利用した運動の生成法を検討する。ロボットのような多関節構造体に弾性要素を取り付け自由運動させると、カオス的運動になることがよく知られている。そこで、本研究では産業用エネルギー効率の良い新しい制御則を提案している。提案した制御則の有効性は、計算機シミュレーションによって確認している。次に、模擬的な実験機も製作した。





(1) 機械加工工具のパーソナルファブリケーション技術の提案

機械加工工具を加工担当者自身が作れるようにする技術で、短時間に、簡易的に、加工機械の近くで機械加工工具が製造する技術を指し、この技術には、

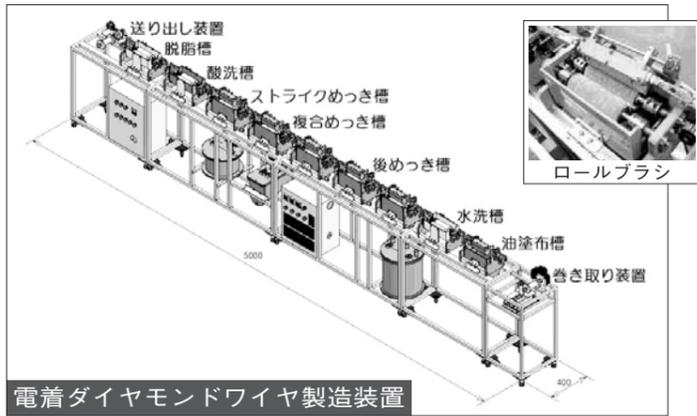
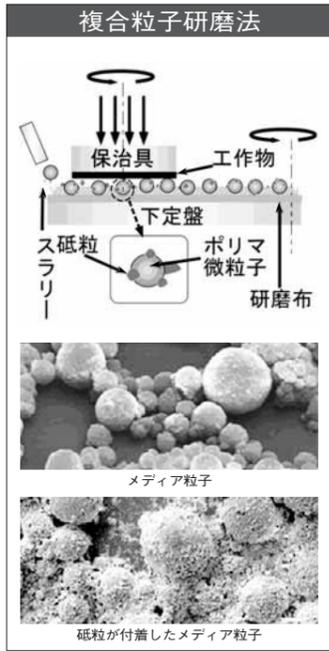
- ① 機械加工工具の機上再生技術、
 - ② 機械加工工具の簡易製造技術、
 - ③ 機械加工工具の機上調整技術、
- の3つがあります。機械加工工具の加工に使用されている部分は、表面のごくわずかな部分です。省資源や工具の取り付け誤差の軽減のためには、加工機械上で摩耗した部分のみを補修する技術が重要となります。①ではめっき法や熱による焼結法などを用いて加工機械上で工具を短時間に再生する技術に取り組んでいます。

(2) メディア粒子を用いた高付加価値研磨技術の開発

研磨の高精度化を目指すために、メディア粒子を用いた新しい形態の研磨方法を提案しています。この研磨法では従来鏡面研磨の問題であった、形状精度の劣化、研磨特性の経時的変化、スクラッチの発生、砥粒の付着による洗浄性の悪化などの問題点を全て解決できます。

(3) 固定砥粒加工工具の開発

遊離砥粒研磨を代替できるような固定砥粒加工工具や高性能切断工具の開発を行っています。スクラッチの発生を抑え、ダメージのない鏡面を高効率に達成できる研磨用固定砥粒工具を提案するとともに、切れ味のよい電着・電鍍工具を高効率に製作する技術の開発を行っています。

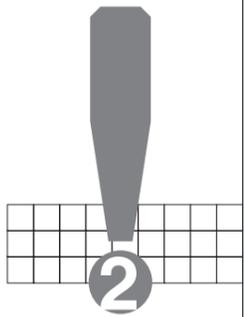


総合理工学院
理工学部・機械工学科 教授/工学博士

谷 泰弘
Yasuhiro Tani

Profile

- 1976年 東京大学工学部機械工学科卒業
- 1981年 東京大学工学系研究科産業機械工学専攻博士課程修了 工学博士
- 1981年～1982年 東京大学生産技術研究所 講師
- 1982年～1997年 東京大学生産技術研究所 助教授
- 1997年～2006年 東京大学生産技術研究所 教授
- 2006年 立命館大学理工学部機械工学科 教授



人間にとって音を知覚する感覚器である「聴覚」。聴覚は、日中だけでなく就寝中も常時活動しているため、劣悪な音環境は聴覚を通じて人体への肉体的・精神的ダメージに繋がりがやすいのが特徴です。そこで人々の快適な暮らしを音響的側面から支援できないかと考え、「音環境の理解」や「豊かな音環境の構築」を柱として、基礎から応用研究まで幅広く活動を行っています。

快適な暮らしを支援する音響技術を追求 ～より安心・安全な社会を目指して～

基礎研究では、音響工学やデジタル信号処理に基づく新しいアルゴリズムの開発や音響インタフェースの構築などを手がけています。その一例が「叫び声の検出」です。人間は声を聞いただけで、叫び声か平静発話か瞬時に判断できますが、マイクロホンと計算機によりこの機能を実現することは非常に困難です。そこで安全・安心な社会の実現を目指して、我々は世界で初めて「叫び声検出システム」(叫び声の検出だけでなく、その発話者の位置も同時に検出)の構築に成功した実績を有します。こうした基礎研究成果は、国内だけでなく海外にも精力的に情報発信・成果発表を行っています。

一方、応用研究では、これまで多数の企業との受託研究や共同研究を実施し、我々の保有する研究シーズを社会に還元・貢献することを念頭に様々な商品開発などに貢献

しました。その一例がヘッドセットマイクロホンアレーです。これは極めて劣悪な騒音環境であっても、ユーザの音声を高音質に抽出できる受信器であり、村田機械株式会社と共同で開発を行い、すでに商品化された実績を有します。また、豊かな音環境の構築を目指して、『立体音響』、『音のカーテン』(騒音を音で打ち消す技術)や『音のスポットライト』(音を領域内に閉じ込める技術)など様々な応用研究にも精力的に取り組み、快適な暮らしを支援する音響技術を日々追求しています。



総合理工学院
情報理工学部・メディア情報学科 准教授/博士(工学)
情報理工学部 副学部長

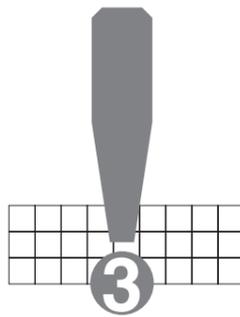
西浦 敬信
Takanobu Nishiura

Profile

- 1999年 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 博士前期課程修了
- 2001年 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 博士後期課程修了
- 2001年 博士(工学) (奈良先端科学技術大学院大学)
- 2001年 和歌山大学システム工学部 助手
- 2004年 立命館大学情報理工学部 助教授
- 2007年 立命館大学情報理工学部 准教授



21世紀に入り、有機化学の分野においても環境に優しく、サステナブル(持続可能)な化学技術に合致した合成反応の開発が重視されるようになってきました。これらの関する独自の合成技術を駆使しながら、日本発の画期的な医薬・機能性化合物の創生を目指した研究を行っています。



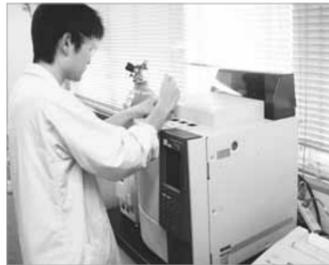
複雑な構造や特異な物性を持つ入手困難な化合物を、斬新な有機合成戦略をもとにつくりだす

ゲノム情報やコンピュータの発達も相まって、欲しい医薬品や生物活性物質を理論的に設計する時代が到来しつつあります。しかし、うまく設計できたとしても、それを作る手立てがなければ全てが夢物語です。

そこで今こそ大事であるのが、新しい有機合成手法や戦略の開発です。特に医薬関連物質へのアプローチに際しては、人体や環境への影響を考慮する新技術の発展が不可

欠となっています。

私たちはこれまでに、有機合成の知識と技術の伝承に携わりながら、創薬研究に役立つサステナブル有機合成を一つの指針として追及してきました。これらの方法を用いて優れた生物活性を持ちながら微量にしか得られない天然物や生物活性物質を合成し、創薬リード化合物とする医薬品開発研究に挑戦しています。



ガスクロマトグラフィー分析計(GC)は合成反応開発の大きな武器の一つ



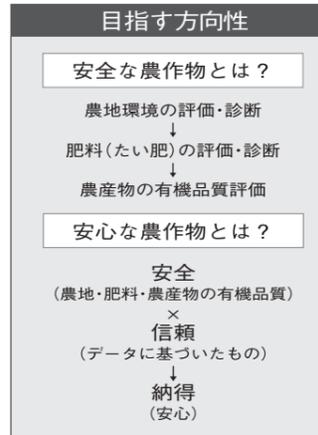
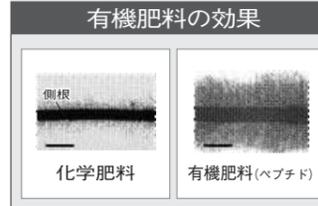
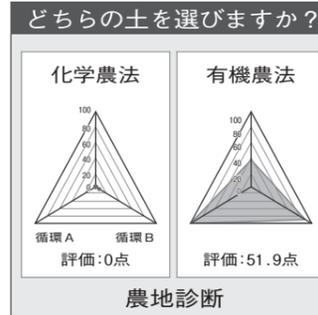
実験台は1人一台個性が現れる場所です



分子を組み立てる楽しさに
つついっのめり込んでしまいます



職員・学生たちと



院生・学部生と日々研究を進めています。

「食の安全・安心」が気になりませんか？私たちは「食の安全・安心」を数値として保証する土壌精密診断技術の研究を進めています。

農地や有機肥料を評価・診断します。農産物の有機品質を評価・診断します。

土壌には多種多様な細菌が生息しています。日本各地の農地を調べたところ、土壌1gあたり平均35億個の細菌が生息していることがわかりました。一方、細菌数が少ない農地も多々みられました。なぜでしょうか？

大きな理由として、化学肥料や農薬が長年にわたって施肥・散布された影響が考えられます。微生物のエサとなる有機物が少なくなり、限られた成分ばかりが供給されると、農地に生息する細菌の多様性は失われてしまいます。このような農地では、有機物を分解する細菌が少なくなるため、物質循環が滞り、植物の栄養成分が

供給されません。そのため、有機肥料を投与しても肥効が出なくなるのです。

こうした農地の改善には、まず農地の状態を正確に把握することが重要です。しかし、農地を診断するための指標は、化学分析に限られていました。我々は、化学分析に加え、生物分析も不可欠であると考えています。細菌の存在量や、細菌が担う物質循環機能(窒素、リン、カリウム)に着目した土壌の診断技術を独自に考案しました。この診断技術により、土壌の品質を数値化して評価・比較することが可能となりました。併せて、有機肥料の評価法も確立しました。

今後は、土壌の評価と農産物の有機品質の関係について、データベースを構築していく予定です。これらの成果に基づいた総合的な土壌精密診断技術は、安全・安心な農作物を再現性良く生産することに繋がると期待しています。

土壌診断のご要望があれば承ります



総理工学院
薬学部・薬学科 教授/博士(薬学)
薬学部長

北 泰行
Yasuyuki Kita

Profile

- 1972年 大阪大学大学院薬学研究科博士課程修了
大阪大学薬学部助手
- 1975年～1977年 マサチューセッツ工科大学留学
- 1983年 大阪大学薬学部 助教授
- 1992年 大阪大学薬学部 教授
- 2008年 大阪大学薬学部定年退職、名誉教授
立命館大学総理工学院薬学部 教授



総理工学院
生命科学部・生物工学科 教授/博士(工学)

久保 幹
Motoki Kubo

Profile

- 1983年 広島大学工学部卒業
- 1985年 広島大学大学院工学研究科博士課程前期課程修了
- 1992年 工学博士
- 1994年～1995年 イリノイ州立大学医学部(文部省在外研究員)
- 1997年 立命館大学理工学部 助教授
- 2002年 立命館大学理工学部 教授
- 2008年 立命館大学生命科学部設置に伴い、
生命科学部 教授に配置換え

第14回 定期総会開催

2009年6月12日



総会

2009年6月12日(金)、立命館大学理工学振興会の第14回定時総会が草津キャンパス(BKC)エポック立命21で開かれ、約40名の法人・個人会員の皆様にご参加頂きました。

総会と懇親会の間に開かれた立命館大学 研究シーズ発表会、展示会にも多数の参加者に来て頂き、好評に終えることが出来ました。



総会議長の高倉秀行会長 (理工学部教授)



公演中の久保幹教授 (生命化学部教授)

について講演が行われました。2004年からスタートした調査・準備段階、本格的な設置へ向けた取り組み、そして開設以降の経緯について、苦労話を交えながら詳細な説明がなされて、最後に両学部として、更なる教育・研究活動の活性化と産学融合研究展開へ向け、新たな決意を表明され、講演が締め括られました。

次は、2008年度に発足した立命館グローバルイノベーション研究機構(R-GIRO)の紹介として、エネルギー領域研究拠点をとりあげた高倉教授より、太陽光発電技術に関する講演がありました。まず、低炭素社会実現に向けたわが国の取り組み「クールアース50」の紹介があり、その中での太陽光発電技術の位置づけと意義について述べられました。続いて、太陽光発電技術と歴史、現状と課題に触れた後、今後20年間に大量普及した場合の問題点を指摘し、グローバルな視点での我が国におけるエネルギーシステムの構築に向けた重要性を強調されました。最後に、立命館大学の本拠点が、この分野に大いに貢献していく決意を述べて講演を閉じられました。



2009年度 研究シーズ発表会・展示会

総会の後、エポックホール、エポックロビーにて研究シーズ発表会、展示会を開催しました。会場では約100名の参加者で盛り上がりました。今回講演内容を2つを用意しました。まず、2008年4月、立命館大学のびわこ・くさつキャンパスに「生命科学部・薬学部」が誕生し、その設立に携わった生命科学部の久保教授より「生命科学部・薬学部誕生までの光りと影」

2009年度役員会

総会に先立って10名の役員出席の下、役員会を開催、総会に提出する議案が承認されました。

第14回定時総会

午後2時から1階・エポックホールで総会を開催。高倉会長挨拶、議長選出に続いて、2008年度の事業、決算、監査を報告、承認されました。続いて、2009年度役員人事の紹介・承認、そして2009年度ASTER奨学生、応募者の中から厳しい選考の上、採択した8名の奨学生の紹介及び新規企画を盛り込んだ2009年度事業計画、予算も満場一致で承認されました。

交流

2009年度 理工学振興会 交流会

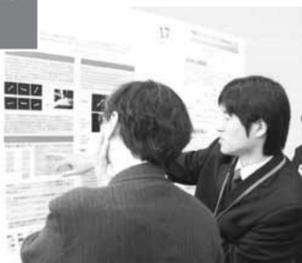
講演会終了後、午後17:50よりエポック立命21の3階309会議室で懇親会が開かれました。理工学振興会の法人・個人会員、奨学生、教員、職員のほか、他の企業団体や一般の参加者など約55名の参加のもと、美味しい食事とともに交流が深まりました。



INNOVATION FAIR 2009

立命館イノベーションフェア2009

博士候補者の研究成果発表



企業ブース展示



出展料 無料

出展企業 募集

本年度も、地元産業界と学生や教職員の交流の場となる、様々なイベントを行います。

「企業ブース展示」実施にあたり、法人会員の皆様から、出展企業を募集いたします。多数のお申し込みをお待ちしております。

【主催】立命館大学理工リサーチオフィス 【後援】立命館大学理工学振興会(ASTER)

同時開催 イベント (変更の可能性があります)

- 企業ブース展示
- イノベーション特別講演会・特別懇親会
- 学生ベンチャーコンテスト
- 博士候補ポスターセッション・ポスター展示
- 学生団体、研究者シーズ展示
- 卒業生研究発表会
- グローバル産学官連携カンファレンス、渡辺三彦表彰式

※説明会日程は別途ご連絡致します。

申込締切 11月6日(金)

別紙FAX申込書に必要事項をご記入の上、下記までお申し込みください。

FAX: 077-561-2811

mail: aster@st.ritsume.ac.jp ◀メールでも申し込み頂けます。

http://aster-ritsume.com/

【お問合せ】立命館大学 理工学振興会事務局
TEL: 077-561-2802 (担当: 大田)

日時 2009年 12月11日(金) 11:00~19:30
※当日の朝9時より展示設置準備をして頂きます。

場所 立命館大学 びわこ・くさつキャンパス(BKC) ローム記念館1階、3階、5階

ブース数 20ブース程度を予定

サイズ 幅270cm×奥行き90cm×高さ210cm

学生ベンチャーコンテスト



INNOVATION FAIR 2008



学生ベンチャーコンテスト
上: 最優秀賞を受賞したアール・ユー・アール
下: 優秀賞CCV workshopの表彰式